ICT 機器の活用に着目した運動が苦手な生徒に対する学習支援

西元　陸（埼玉大学教職大学院）

１．目的

運動が苦手な生徒を体育教師にとってどのように支援していくかは常に考えるべき課題である。体育授業では運動が苦手な生徒だけではなく、様々な生徒が学習集団に存在し、授業・指導法を展開していかなくてはならない。仲間と共に過去の自分を振り返り、成長を目指すことが学校体育では必要だと考えた。そこで、本研究では子どもたち一人一人に個別最適化される ICT 機器を使用した学習支援に着目する。

体育授業において ICT 機器を用いることで、修正すべき課題を明確に認識でき、運動技能を高めるために学習に取り組むことができると考えられる。そこで、ICT 機器を用いた運動が苦手な生徒に対する学習支援の在り方を検討することを目的とした。

２．研究方法

単元名「陸上（走り幅跳び）」

全 6 時間で単元計画を立て授業実践を行った。単元の目標は 1 時間目の記録より 6 時間目の記録を伸ばすことであった。ただ単に伸ばすのでなく、自分の動きを把握し、課題を捉え、その課題を解決すべく仲間と共に取り組み技能を身につけることを行った。

１）対象者

A 市立 B 中学校 1 年生 168 名。このうち欠席者を除き、授業実践を行った群（ICT 群）男女それぞれ 3 クラス計 79 名、比較対象の群（統制群）男女それぞれ 2 クラス計 60 名を分析対象とした。

２）調査方法

走り幅跳び記録の 1 時間目と 6 時間目の平均値を比較した。佐藤（2021）の新 3 観点の学習評価完全ガイドブックを参考にアンケートを作成し実施した。

３）分析方法

ICT 群と対照群の 1 時間目と 6 時間目の走り幅跳びの記録を比較した。さらに ICT 群内の運動が苦手な生徒の記録を ICT 群内の運動が得意な生徒及び対照群内の運動が苦手な生徒と男女別に平均値を比較した。

男女別に測定記録を従属変数、群(ICT 群、対照群)と測定時期(1 時間目、6 時間目)を独立変数として 2 要因分散分析を行った。アンケートの各項目を従属変数として同様に分析を行った。

３．結果と考察

どの群においても走り幅跳びにおける記録の向上やアンケート結果の得点に有意な向上は認められなかった。新たに授業改善を行う必要があると考えた。動作のポイントがわからず共有できないので、生徒同士だけのフィードバックでは効果が薄い。よって、動作のポイントを全体及び個別伝える方法を工夫する必要があったと考えられる。

一方で今回の実践を元に ICT 機器を用いた体育授業を考えてみると、以下の様な不都合があった。

第一に、教員の準備の大変さである。具体例として動画の編集やデータの管理の難しさが挙げられる。

第二に、生徒のタブレット使用の不慣れさである。具体例として、初めて使うアプリの難しさや上手く撮影できないことが挙げられる。

以上のことから、ただ単に ICT 機器の活用するのではなく、目的や時間的・経済的コストを総合的に考えて ICT 機器に振り回されないようにすることが重要であると考えた。

４．結論

本研究では、ICT 機器に着目した運動が苦手な生徒に対する学習支援においてアプリを使用やグループ学習の手立てから実践を行った。その結果、ICT 機器を使用しても記録やアンケート結果に有意な向上は認められなかった。今回の実践の結果、動作のポイントをシェアする必要性や、そもそもコストを考えると ICT 機器は必ずしも有効ではないと考えられた。

５．主な参考文献

古田久（2018）運動が苦手な児童・生徒への配慮を考える 4 つの視点，体育科教育，66(2)：30-33.